

に移した。このことにより10年間、上野動物園にはライオンがいなかった。この間、投書箱には「ライオンがいなかった」「ライオンを見たかった」という投書が一番多かった。なお、インドライオンの導入によって、ライオンの展示は復活している。

さて、近年の上野動物園の歴史は、来園者の増加に対応するための施設分散の歴史といってもよい。来園者が増え、動物をきちんと見てもらうことが困難になったため、井の頭自然文化園を作って来園者を分散させ、インドゾウの導入によりさらに入園者が増加したことを契機に多摩動物公園を作り、パンダの導入によりますます入園者が増えたため、水生生物を分けて葛西臨海水族園を作ったのである。ただし、マスコミは、そうした部分は一切報道してくれず、ただ「努力が足りない」と批判する。

私は、動物園の入園者数をその園の面積で割った数値をその動物園の入園者密度、簡単に言えば混雑の度合いとして考え、これをひとつの目安としている。この数値で比較すると、上野動物園は今でも世界一過密であり、多摩動物公園は理想的である。大森山動物園も、ヨーロッパやアメリカの動物園並みの数値となるようがんばってもらいたい。

さて、最近の上野動物園のクマであるが、新しいクマ舎「クマたちの丘」では二つの取り組みを行っている。ひとつは、日本の里山の自然環境により近づけ、爪痕や足跡を見せる試みであり、もうひとつは冬眠である。また、クマとタヌキという異種間の展示場共有の試みも行っている。

冬眠は特に注目されてるのだが、冬眠中のクマはエサを食べず、糞もせず、11キロも体重が減少することが分かった。また、冬眠前の秋にはエサをガツガツ食べるのに、冬眠後の春にはそれほどエサを食べない。山(野生)では80キロでも大型と言われるクマが、動物園では100キロを超えるものがざらにいる状況から考えると、あらためて冬眠の重要性を認識した。一方で冬眠させるためにはクマを冷蔵庫に入れることになるため、マスコミから

の批判もあった。だが、冬眠の重要性を考えると、動物福祉にも適っていると考えている。

最近では、減少した日本の在来馬の保護にも力を入れている。種子島のウシウマや木曾馬、トカラウマなど、日本人と深く関わってきたウマが減少・絶滅し、多くの日本人はサラブレッドとポニーしか見たことがないという現状にあって、いわば原点回帰の考えである。

国連機関からの働きかけもあり、動物園にとって、種の保存や、域外保全と域内保全も含めた環境保護・教育といった役割は世界共通である。大森山動物園のイヌワシやゼニタナゴの保全活動は高く評価されており、一種のステータスにもなっている。さらに、動物園には文化財としての動物を保護し、飼育するという役割も考えられ、秋田の動物園としては、在来種である秋田三鶏の保護や飼育に取り組むことにも意義があるのではないかと。



#### 【略歴】

1947年、東京都生まれ。明治大学農学部卒。1972年に多摩動物公園の飼育係になり、日本産動物と家畜の担当し、ノウサギや鳥類の飼育繁殖で技術表彰を受ける。多摩動物公園と上野動物園の飼育課長を経て、2004年から上野動物園園長。現在、日本動物園水族館協会の会長も務める。主な著書に「日本の哺乳類」(学研)、「今日も動物園日和」(角川学芸出版)、「ウサギのかいかたそだてかた」(岩崎書店)など。